

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その41）

～「応援ハラスメント」～

2022年11月吉日

U12部会広島地区

SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また10月9日から始まり、先日11月3日に終了した『第48回 広島地区ミニバスケットボール大会』では、長い期間に渡り大変お世話になりました。

地区大会で勝ち上がった女子『府中』『南観音』『海星』『神崎』『伴東』『矢賀』『宇品』『五日市』、男子『五日市観音』『千田』『草津』『三篠』『府中』『口田』『井口明神』『五日市』の広島県大会での健闘を祈念いたします。

さてプロ野球の広島カープは、今年度は5位に低迷しましたが、Bリーグのドラゴンフライズは快調なスタートを切っています。

またJリーグのサンフレッチェ広島は、先日の「YBCルヴァン杯」で見事優勝しました。

優勝が決まった次の日の新聞に、広島のDF荒木隼人選手（26）の手記が載っていました。優勝できたのはたくさんのサポーターのおかげだと記した内容ですが、その中で監督について述べられた部分があり、とても興味あるものでした。

私たちミニバスケットボールの指導者も心に留めておかなければいけないことだと思ったので紹介します。

本当にたくさんのサポート、ありがとうございました。やっと優勝できてホッとしています。

（中略）

今季掲げた目標は「タイトル奪取」でした。実現できたのは、スキップ監督との出会いがあったからだと思います。僕にとって初の外国人監督の教えには、新しいものがたくさんありました。大きかったのは監督が発する言葉です。選手へのアプローチが新鮮でした。

どんな相手でも試合が終われば、監督は「相手がよかった」と認めた上で「相手があって、自分たちがある。相手もよかって、自分たちもよかった。その上で勝てたのが、さらによかった」という話をします。

勝った時も負けた時も、必ず相手をリスペクトする指導者は、僕の人生では初めてかもしれません。

リーグ優勝のかかった9月10日の川崎F戦は、0-4で大敗してしまいました。試合直後のピッチ上の円陣で、監督は「1回0-4で負ける方が、4回0-1で負けるよりいい。悲しむ必要はない。相手は本当に強かった」と言ってくれた。すごく落ち込んでいる状態でしたが、監督の一言で前を向けました。

（後略）

では話を本題に進めますが、今回のテーマは「応援ハラスメント」としました。今の時代、ミニバスケットボールの指導をしたり、大会を運営したりする際、保護者の皆様の支えや協力は不可欠です。また試合での温かい応援は、選手のみならず、みんなにとって、大きな励みになることは間違いありません。

ただ一方で、応援が必要以上に過熱しすぎると、励みどころか大きなプレッシャーとなり、選手を苦しませることになりかねません。

今回の資料はサッカーでの話題ですが、ミニバスケットボールの世界に同じようなことが起きてはいけないので、一つの問題提起として載せさせていただきます。

指導者も保護者も選手のことを第一に考え、子どもたちの頑張りを支え、一人一人の力を伸ばす手助けをする存在でありたいものですね。

最初の資料は、先日のヤフーニュースに載っていたもので、長くスポーツを含めた教育現場取材し続けているジャーナリストの島沢優子さんのレポートです。

「10月10日はスポーツの日で、運動会や部活・クラブチームでの試合でにぎやかな声が聞こえた地域も多かったことだろう。

しかし、照れ隠しではなく「試合に来てほしくない」子どもが訴える現状や、親に「応援ハラスメント」の啓もう活動を行っているチームもあるという。

一体それはどういうことなのか。

「柏市ミニサッカー交流会」で、応援に訪れた保護者らに1枚のカードが配られた。全部で300枚。一人一人に手渡されたそのカードは「ポジティブな応援」と「大人の心得」の二つのメッセージが並ぶ。

デンマークサッカー協会とスイスサッカー協会が以前から取り組む「応援ハラスメント」の啓もう活動に使用されたカードの文言を引用して作成されたそうだ。

また大会名を「大会」から「交流会」に変更したのは、大人が勝利や結果にこだわって、子どもたちがサッカーを楽しめないのが理由だ。

応援席にいる親たちが熱くなり「何やってるんだ!」「今のはシュートだろ!」「(ボール) 追えよ!」などと強い言葉を浴びせるのは、いわば「応援ハラスメント」である。「応援席ハラスメント」とも呼ばれる。

日本では、サッカーのみならず、ミニバスケットボール、小学生バレーボール、少年野球といったジュニアスポーツすべてに蔓延するよろしくない文化である。

強い言葉を浴びる子どもたちは、やがて大人に言われた通りにしかプレーしなくなる。

シュートを外すなどミスをすると、ベンチに座るコーチを通り越してスタンドにいる自分の親のほうを見る。大人の顔色を気にしながらプレーするのでは楽しくない。やる気が無くなってしまふのだ。

大会役員の方は「カード配布も初めての試みです。少年サッカーの試合で、大人の怒鳴り声や暴言が行き交うことは珍しいことではありません。勝たせたい気持ちがついほとぼしるのだと思いますが、その何気ない言葉は、子どもの判断を奪ってしまいます。これが一つの（啓もう）のスタートになればと思います」と話した。

とはいえ、この応援ハラスメントは日本だけの問題ではない。

スペインリーグのビジャレアルに勤務する佐伯夕利子さんが先ごろSNSに「親フリーガンの特徴とは？」という動画をアップした。

それは、試合前に父親が息子に「人生は戦争だ」と勝つことを煽（あお）る場面から始まり、「1点取ったら5ユーロあげる」と約束する。

画面には大きな文字で「来ないで」。子どもたちは例えばこのようなことを親に訴える。「もし、試合に勝つことばかり要求するなら、来ないで」「もし、ジャッジミスだと思うたびにレフェリーに怒鳴るなら、来ないで」「もし、ぼくがベンチに座っていることが我慢できないなら、来ないで」「もし、ぼくがミスするたびに怒るのなら、ぼくの試合を観に来ないで」。

動画を見ているだけで胸が詰まる。

岐阜協立大学の高橋正紀教授のもとには、イギリスの有名サッカー雑誌の付録だったという「フェアプレーのための12カ条」という動画がある。

その中の11番目に「悪い言葉が存在する場所は、スポーツの世界にはない」と明示されている。

高橋教授は「今ある少年サッカーの応援ハラスメントには、これが一番近いかもしれません」と話す。「自分の親以外のチームメイトのお父さん、お母さんから言われるので、子どもが沈んでしまうと聞きます。子どもへのネガティブな声かけがハラスメントだということを、日本の親御さんたちは分かっています。自己決定権を奪うわけなので、絶対によくありません」と続けた。

日本のサッカーはもちろん、すべてのスポーツが、保護者の熱意やエネルギーに支えられているのは確かだろう。

しかしそのエネルギーのベクトルを今一度見直してほしい。

躍起になるのは目の前の子どもに結果をもたらしたいからだ。

だが、子ども時代の「今」が人生の最高点に達する子育てで本当にいいのか。

伸びしろを残すコーチングがあるように、子育ても親が余裕をもって見守ることで「後伸び」する。

続いての資料は、サッカー元日本代表だった川崎フロンターレの中村憲剛さんが、サッカー教室イベントで話した内容を中心に書かれています。

サッカーをする子どもを持つ一人の親としての考え方は、とても重みのあるものだと思いますので紹介します。

また、中村選手が「あることをしないとたしなめる」の「あること」の内容や、

「チームのために頑張ることは意識の持ち方一つ」と話されている点は、日ごろ私も、目の前の選手に伝えていることなので、指導者の一人としてとても嬉しく感じました。

まず司会者から「保護者の態度が、子どもに影響を及ぼすと思いますか？」という質問に対しては、「それは間違いないですね。親は子どもの鏡だと思います」と即答。

「親が監督・コーチに対してネガティブなことを言うと、自然と子どももそうになってしまいがちです。なので、僕はネガティブな事はなるべく言わないようにしています」とスタンスを述べました。

お子さんが小学生の頃は「試合を見ながら、チームメイトの良いプレーを積極的に褒めていた」そうです。「そうすると、それが他の保護者にも伝わって、みんなで子どもたちの成長を見守ろうという雰囲気になっていくんですね」とポジティブな言葉かけの大切さを話します。

現役引退後、時間を見つけては、お子さんのサッカーを見に行くという中村さん。試合を見ていて、プレーについて言いたくなることはあるそうですが、そこはぐっと我慢。

ただし、お子さんが「あること」をしないときは、強くたしなめるそうです。

「これは妻とも共有しているのですが、子どものプレーを見ていて、チームのために走らない。自分がボールを取られても奪い返さないなど、チームのために頑張ることができなかつた時には注意しています」。

シュートを打つ、パスを出すといったプレーの向上にはトレーニングが必要ですが、チームのために頑張ることは、意識の持ち方ひとつで、すぐに実行に移すことができます。

「頑張ることは、意識次第ですぐできることなので、小学3年生ごろから言っていました。『自分が守備の選手だったとして、前の選手がボールを奪われたのに、取り返しに行かなかつたらどう思う？』という話はよくしました」。

そのような対話を続けることで、お子さんのプレーは変わっていき、今では「行き過ぎじゃない？(笑い)」というほど、ハードワークになったそうです。

イベントの最後に、中村選手は次のようなメッセージを送っていました。

「子どもが楽しくサッカーできるのは、お父さん、お母さんにかかっていると言っても過言ではないと思います。指導者もちろんですが、一日の中で一番長く一緒にいるのは保護者ですから、その中で、親と子どもと一緒に成長していくことが大切なのだと思います。僕自身、失敗と後悔を繰り返しながら、親として成長していきたいと思っています。僕も頑張ります。一緒に頑張りましょう」。